



令和8年度 東京都北区立王子桜中学校

令和8年4月号

王子桜だより

校長 阿久津 光生

〒114-0002

東京都北区王子2-7-1

Tel 03-5902-3155

共生の精神に満ち、国際的視野に立ち、大きな夢の実現のために限りなく向上に努める人を育てる。

教育目標 **自主 創造 飛翔**

《令和8年度 新年度・新学期が始まりました！》

4月に入り、校庭の草木も新しい葉を広げ、緑がまぶしくなってきました。春の訪れとともに、王子桜中学校は令和8年度の新学期が始まります。

新入生150名、2年生140名、3年生170名、全校生徒460名での船出です。新たな気持ちのもと、共に助け合いながら、新年度・新学期をスタートしていきましょう。

思いやりや優しさを持って、友達・仲間を大切にしながら、みんなで前向きに取り組んでいてください。そして、王子桜中の良い伝統を受け継ぎながら、生徒のみなさんと教職員が一丸となって、より良い学校をつくっていきましょう。

《本校の教育目標等です！》

北区教育ビジョン2024の人権尊重の精神を基調とし、

共生の精神に満ち、国際的視野に立ち、大きな夢の実現のために限りなく向上に努める人を育てる。

- ・自主 自ら考え正しく判断し行動する人
- ・創造 先人に学び、未来の社会を創る人
- ・飛翔 未知の領域に挑み、新たな価値を生み出す人

《アントレプレナーシップ教育を推進して参ります！》

「アントレプレナー」という言葉は、フランス語の「entrepreneur（始める、企てる）」という動詞から派生し、中世のフランスでは「仲買人」や「貿易商」を意味しています。よって、「アントレプレナーシップ」とは元来は起業家精神のことや、起業家的資質や行動能力のことを意味する言葉であり、正に北区にゆかりの深い渋沢栄一翁に代表される人物がもつマインドです。

しかしこの概念は、単にビジネスの場でのみ使用されるものではありません。凄まじいスピードで変わっていく現代社会においては、自らがどのように生きるかを考えて、そのために必要な物事を実行する力を習得することが、これまで以上に求められています。つまりアントレプレナーシップ教育とは、自ら課題を見つけて、課題解決に向かってチャレンジしたり、他者と協力しながら解決策を探求したりすることができる知識や能力、態度を身につけることに他ならないのです。

日本近代化の父として、北区民のみならず国民から今なお愛されている渋沢栄一翁の精神が息づく本校において、渋沢翁はもちろんのこと、北里柴三郎博士、津田梅子先生、高峰譲吉博士等の様々な偉人や、現在活躍する起業家等から学び、現在の社会を知り、研究を重ねて、未来を創造する生徒の育成を図るべく、北区型アントレプレナーシップ教育を推し進めてまいります。

《王子桜中ホームページ》

メインサイトでは、【学校生活】⇒【学校生活の様子】に、日々の生徒のみなさんの様子を紹介しています。昨年度から北区広報課より、写真は1日3枚まで、1か月に25日分のみと制限されておりますので、沢山の情報を掲載することは出来ません。よってなかなか満足のいく内容にはならないと思いますが、ご覧いただければ幸いです。

また、【おたより】⇒【学校だより】は、毎月発行させていただいております。基本的には、毎日の生活の様子に載せた記事等から選んで掲載しております。

また、『アントレプレナーの生き方』を今年も特集してまいります。

なお、学校だよりは、保護者の皆さまには『tetoru』で、生徒のみなさんには『まなびポケット』で配信させていただいております。あわせてご利用ください。



王子桜中ホームページ QR コード

北区でつながり渋沢栄一翁・高峰讓吉博士

～日産化学株式会社～

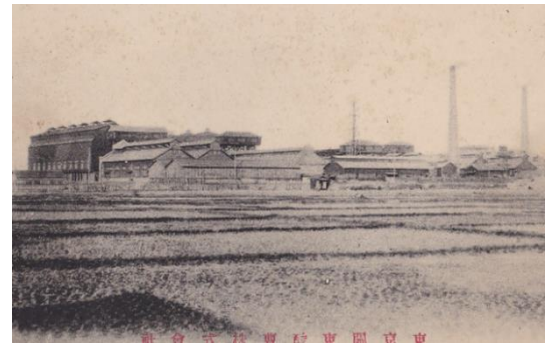
日産化学は、1887（明治20）年、高峰讓吉博士、渋沢栄一翁、益田孝ら明治の先覚者により、日本初の化学肥料製造会社である東京人造肥料会社として創業しました。日本の農業に新しい化学肥料を普及させたい。高峰讓吉の熱い思いが、渋沢栄一翁や益田孝ら財界人の心を動かし、東京人造肥料会社は設立されました。立ち上げに奮闘した高峰博士がアメリカへ去ったのち、会社はようやく軌道に乗り始めます。ところが、1893（明治26）年5月、火災で工場がほぼ焼失してしまいました。栄一翁は、総会で株主たちに語りかけました。「我々がこの事業を始めたのは、決して利益のみを目的としたのではない。もし諸君が解散を望むなら、私ひとりでも株式全部を引き受け、借金をしてもこの社業を継続経営する」。会社の存続は栄一翁に一任されました。この火災があった2ヶ月前の3月には、アメリカに行った高峰博士のウイスキー工場が原因不明の火災で、全焼し、あまりのショックで肝臓病再発、緊急手術で一命をとりとめた時でもありました。その後、栄一翁の尽力で、東京人造肥料会社は関東酸曹株式会社、日本化学肥料株式会社の3社合併を果たし、大日本人造肥料株式会社となりました。昭和12年に日本産業株式会社傘下の日本化学工業株式会社に資産等を包括譲渡して、日産化学工業株式会社に改称、そして2018年7月、日産化学株式会社になりました。

北区豊島には1896年から1923年まで大日本人造肥料株式会社と合併した関東酸曹株式会社がありました。この会社は、栄一翁が1873年に国産の紙を日本中に供給することを目的として設立した「王子製紙」（1893年に改称）の印刷局抄紙部製薬課の前身です。当時、バルブの生産工程に必要な硫酸とソーダを生産していた部門が組織改正して、関東酸曹株式会社となりました。後に高峰讓吉博士は、米国の最新技術を持った会社と関東酸曹を結び付けています。

1917（大正6）年2月、高峰讓吉博士が一時帰国したため、東京・日比谷の帝国ホテルで関係者による招待の宴を開催しました。高峰は会社の発展を大いに喜び、創業30周年を祝う祝辞を寄せました。そのなかに会社が30年間の間に総資本金が100倍になる発展を遂げていることへ喜びを読んでいた。1918（大正7）年5月、高峰博士は栄一翁の飛鳥山邸にも招かれて講演を行いました。ちなみに、飛鳥山邸は暖依村荘（あいいそんそう）とも呼ばれ、日本館に加え、西洋館、茶室「無心庵」を建設。整備された立派な庭園も設けられ、単なる私邸にとどまらず、国内外からの賓客を迎えるなど栄一翁の民間外交の一大舞台であったのです。

【王子工場】

1897（明治30）年に関東酸曹の新工場として建設された王子工場は、1923（大正12）年の合併後も戦前の生産品目は硫酸、肥料、各種薬品など数十種類に及び、主力工場として発展してきましたが、都市部にあったことから1960（昭和35）年代に移設計画が持ち上がり、王子工場は1968年夏頃から順次操業を停止し、1969年12月に生産全面停止となり、袖ヶ浦工場ほかに使命を譲ることになりました。従業員は当社・各工場および関連会社などに配属され、工場撤去作業は1970年3月に完了し跡地は日本住宅公団（現・都市再生機構）に譲渡され、現在の豊島五丁目団地になっています。



関東酸曹「北区中央図書提供・梶原利夫蔵」



（會露披同合社三）務換翁讓吉

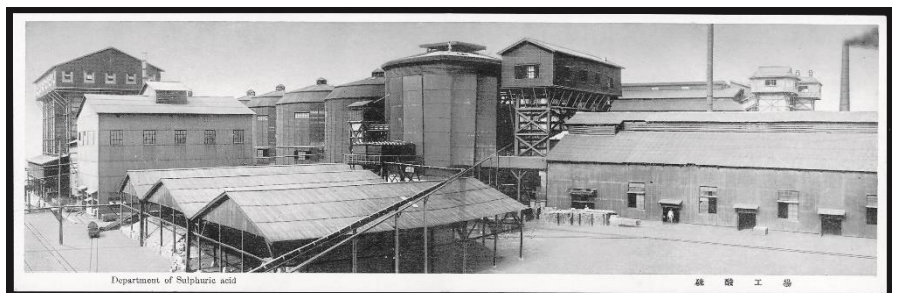
3社合同披露会での渋沢栄一翁のあいさつ

【提供 日産化学株式会社】



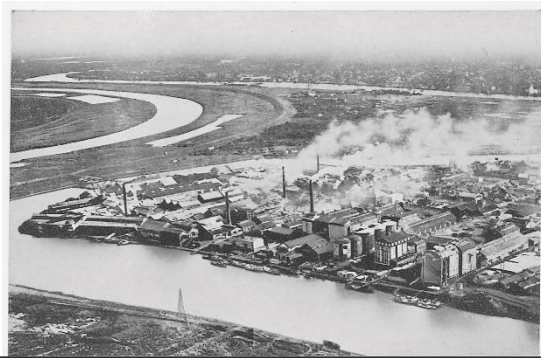
高峰博士が一時帰国した際の招待会にて
左：渋沢栄一 右：高峰讓吉

【提供 日産化学株式会社】



日産化学王子工場 全景と工場 【提供 日産化学株式会社】

今年1月7日(水)に、本校保健委員会の代表のみなさんが中央区日本橋にある日産化学本社を訪問し、広報担当の片山様をはじめ多くの皆さまにお世話になりました。親切丁寧に、会社の説明をしてくださり、マンガでわかる

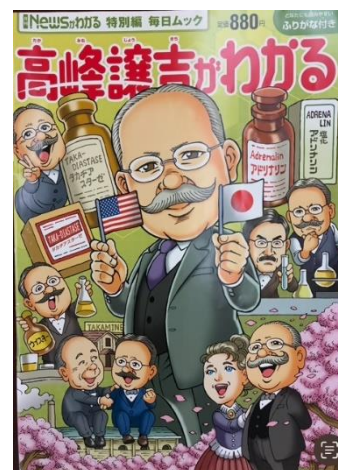


豊島五丁目団地

高峰譲吉博士の本まで頂戴し、日産化学と高峰譲吉博士との関係がとてもよくわかりました。更には、日産化学の社内誌「POLARIS」にも本校の生徒が訪問させていただいたことを掲載していただきました。重ねてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



保健委員会の代表のみなさんが日産化学化学本社を訪問



「高峰譲吉がわかる」
毎日新聞出版

日産化学は、化学の力で、4つの両域で活躍しています。化学品事業では天然ガスを原料にアンモニアを製造。さらにアンモニアから尿素や硝酸などの誘導品を製造しています。「アドブルー」は高品位尿素水。窒素酸化物を無害な窒素と水に分解することで、ディーゼル車が排出するガスを浄化しています。機能性材料事業は、「ディスプレイ材料」「半導体材料」「無機コロイド」が事業の3本柱。例えば、パソコンやスマホなどの液晶ディスプレイをつくるのに必須な液晶分子を一定方向に配列させるための材料などを手がけています。農業化学品事業部は地球環境に優しい農薬を開発・製造しています。農薬の研究から生まれたのが、動物用医薬品の原薬である「フルララネル」という化合物の発明です。イヌやネコに寄生するノミやマダニを駆除する薬の主成分です。ヘルスケア事業は新しい親しい薬になるかもしれない候補化合物を探し、その中の開発候補品を製薬会社にライセンス(使用権の法的許可)することで、医薬品の原薬開発をサポート。また、お客さんから依頼された原薬製造とその供給も担っています。日産化学は、企業規模にとらわれることなく、新たな技術、製品を生み出すことにこだわる企業です。それにより、世界の化学業界の中でも、「特色ある価値創造型企業」の地位を確立することを目指しています。新たな技術、製品を生み出す原動力となるのは、研究開発です。日産化学がいかに研究開発を重視しているかを象徴するのが、売上高研究開発費比率の高さ。数ある化学メーカーの中でも常にトップを争う水準です。「精密有機合成」「機能性高分子設計」「微粒子制御」「生物評価」「光制御」の5つのコア技術を持ち、さらにそれを推し進めること、また、それらの技術を融合させて、全く新しい技術や事業を生み出すことにもチャレンジを続けています。

創業から約140年の歴史を有する日産化学。化学肥料の製造にはじまり、時代とともに社会のニーズに応える技術開発に取り組み、現在もiPS細胞の培養用材料など先進的な製品を世に送り出している。本社会長室に掲げる、初代社長・渋沢栄一氏の書「信を以て万事の本と為す」を企業のDNAとして、業容を大きく変貌させてきました。

高峰譲吉と東京都北区の関わりは、前号で紹介した醸造技術向上への提言や、渋沢栄一との協力による日米協同事業などに深く表れています。彼らの足跡は、日本に産業の礎を築き、現在、日産化学の隆盛へと繋がっていると言えるのです。

